

第五章 なんじゃもんじゃ

平成2年7月から平成三年六月までのできごと

新チーム構成メンバー

二年生	一年生	平成二年度新入生
マネ 溝越(淵中)	マネ 生島(淵中)	マネ 富永(三川中)
選手 松山(清水中)	マネ 西村(戸町中)	選手 鴨川(中里中)
選手 浜口(深堀中)	選手 一瀬(長与中)	選手 神崎(有喜中)
選手 松尾(長崎中)	選手 山口(深堀中)	選手 安部(横尾中)
選手 山口(横尾中)	選手 山川(山里中)	選手 平田(長与中)
選手 川原(深堀中)	選手 川迫(東部中)	選手 吉村(苓北中)
選手 白浜(真城中)		選手 野口(土井首中)
選手 松下(戸町中)		選手 三浦(西浦上中)
		選手 吉永(西浦上中)
		選手 下村(式見中)
		選手 宮田(小江原中)

NUTCRACKER

平成二年六月五日。

その日は栄光へ向かっつてのスタートになるはずの日だった。

高校総体の最終日であるその日は大差で決勝の相手を破り、「さあ、いよいよ全国制覇に向かっつてスタートだ」という雰囲気、当事者である私達ではなく周囲に漂っていた。バスケットのテレビ放映を手掛けることに決めた地元民放局も、そのメインに、今年から来年にかけての鶴鳴を追いかけてみようという意図があった。

だからもう、否応なしに鶴鳴の二回目のインターハイ優勝に向かっつてのドラマが、それぞれの勝手な希望と夢をのせてこの日クランクインされたのである。

その日私は、わざわざ放送の解説のために来崎した中村監督達数人とともに夜の街に出た。酒は飲めない方だけれども、この日は私の前途を祝ってくれるのだからビール一杯ぐらいはつきあわなければならぬ。

私たちは食事を済ませた後でスナックに行った。そこでしばらく歓談し、これからカラオケでも出ようかという頃だった。トイレに立った私はそこで愕然とした。また、あの、二度と思いだしたくないワインレッドの血尿が出たのである。

「なぜ今……！ なぜ……？ ようやくこれから全国制覇が狙えそつだという時に、なぜ……！」
私は本当に神を怨んだ。「なぜそこまでいじわるをするんだ！」「私が一体どんな悪いことをしたというんだ！」そう思った。

席に戻った私は努めて平静を装おうとしたが、私の頭の中にはもう血尿のことと選手の顔以外のもの

は何も浮かばなかった。しかし、一生懸命その場はみんなに合わせ、午後一〇時になったところで「みなさん、すみません、きょうはこれで…」といって席を立った。私が夜の街につきあうといつてもせいぜい一〇時までだということとはみんな知っているし、今までもそれが通例になっていたので、「あ、どうも、それじゃ」といって送り出してくれた。トイレに立ってからそれまでのなんと長かったことが、わずか一時間ぐらいが何十時間にも感じられた。

私は、自分の不運にも落胆したが、そのことが誰かに知れることがもつと怖かった。今、もしこのことがバレればたちまちその噂は広がる。そうなれば、これから全国制覇を狙おうとしているチームの活動自体に亀裂が入ることになるし、これからの選手募集にも大変な影響が出てくる。だから、どんな身近な者にも絶対知られてはならないのである。

その夜まんじりともせずには過した私は、翌朝中村監督の泊っているホテルを訪ねた。昼頃の便で帰ることになっていた中村監督をロビーに呼び出して私は言った。

「言っておきたいことがあります。聞いてください」

「なんだよ。あらたまつて」

「… 今後のことなんですけど、私が不可解な行動やカズさんを不愉快にさせる言動をとることがあるかも知れません。それに目をつぶってもらいたいです。不可解なことがあっても、時期が来たら私の方からその理由を説明するからそのことに関して詮索しないで欲しいんです」

「な、なんだよそれ」

「いえ、例えば、合宿に来ないかと誘われても行かないとか、今度長崎に行くからその時つきえといわれてもそれを断るとか、今までなら必ずウンと言っていたのに断るとは何か変だと思われるようなことが今後あるかも知れないけれども黙って詮索しないでくれということです」

「なんだい。身体のことか？」

さすがに、前料のある私のことだから中村監督は私のからだのことを直感的に考えた。そしてそれはすばり当たっていた。

「はっはっは、ま、いろいろとね」

もちろん私は肯定せずに「ごまかす。

「じゃ、家庭のことか？」

中村監督はまだ追求する。

「うーん」

「バスケットのことか？」

「ま、とにかく時期が来たら言いますから」

私は努めて明るくふるまってその場はごまかした。中村監督にだけはこうして釘をさしておこうと思っただのには理由がある。他の人はどんなにごまかせても中村監督は必ず私の不可解さにはずれ気がつく人である。そして、不可解だと思ったらそれが悪い方であれよい方であれ突き止めなければ気が済まない人である。私がこうして釘をさしておかなければ、中村監督はあらゆる情報網を使って私の不可解な行動を調べあげるに違いない。

調べ上げられた結果が当たっていたとしても私は困らないけれども、調べ上げる途中に介入した人達から「どうも山崎は身体の具合が悪いらしい」というような噂が流れるのが怖かったのである。

次の日、私は時間休暇をとって大病院に行った。その後も病院に行く時は一旦学校に出勤してから時間休暇をとって行った。直接家から病院に行けば家族にバレるし、また学校に行ったことにして直接病院に行けばもし家族が学校に電話するようなことがあって「山崎先生は午前中休暇になっています」

などと対応されるとんでもないことになる。学校に一旦出てから時間休暇をとれば、私は体協やその他の組織でも仕事があるので忙しい人間だから、時間休暇を取ってもカムフラージュできるのである。

その日は尿検査だけだった。ガンの検査も腫瘍の検査もするので手間がかかるから、結果がわかるのは来週の同じ曜日になる。その時にまた外来で来てくれと言われた。

それからの一週間、私は普通の生活をした。いつもやっているジョギングもいつも通りにやった。走ると出血がひどくなるのかと思ったがそうでもなかった。そして、出血は突然パタッと止まったりまた出血したりして、前回の時のように出っぱなしということとはなかった。

私は日が経つにつれて冷静になっていった。もし悪性のものであっても二年間は絶対に入院もしないしバスケットも中断しないと心に決めた。そのために寿命が縮まってもいい、どんなことがあっても全
国優勝のチャンスを逃がしたくはないと思った。

今でこそ笑い話として言えることだが、血尿が出ると下着に血液のシミがつく。私はその処理に苦慮した。風呂に入る時に洗濯物を出す。それが問題なのである。家内が洗濯をする時に、その血液のシミに気がついたら、私には前科があるだけにたちまちバレてしまう。そこで考えたのがトイレットペーパー作戦だった。

私はトイレを済ませるとトイレットペーパーを正方形にたたんで下着の中に入れておくことにした。私の下着はトランクスではなくブリーフである。その中にトイレットペーパーを入れておくと、そのトイレットペーパーには血液のシミがついても下着自体にはシミはつかないのである。もちろん、トイレットペーパーはごわごわして気持ちが悪い。「女性って大変だなあ。生理の時はいつもこんな感じなんだろうなあ」人間というのは不思議なもので、自分だって大変なことになるのかもしい時にそんなくだらないことをふと考えたりするものである。

さて一週間後、尿の成分の検査は異常なしだった。次はエコー検査である。私はベッドの上に寝せられてお腹にノリのようなベトベトするものを塗られた。そして器械を当てられるとブラウン管に私の腎臓の映像が映し出された。

「ナットクラッカーだね、これは」

医師がつぶやいた。全身をアンテナにしている私はそのことばを聞き逃がさなかった。帰ってからすぐ辞書で調べた。NUTCRACKERは「くるみ割り器」とある。「何だよこれは？くるみ割り器？腎臓が圧迫されるのかなあ？」腎臓の形をくるみに置き換えて、私はそんなことを想像した。

三日後、私は泌尿器科外来を受診した。「えー 山崎さんですね。間違いなくナットクラッカー症候群ですよ。ナットクラッカーというのはですね…」検査部門から送られてきたデータとカルテを見比べて外来診察担当の医師はそう言い、紙を取り出して図解を加えながら説明を始めた。

左の腎臓から出た腎静脈は、腹部大動脈がちょうど二股に分れた部分をすり抜けるようにして心臓に戻る。その二股の部分を通る時に、腎静脈が二股に分れた動脈に圧迫され腎静脈の内圧が非常に高まる。その結果として腎臓内に押し返された血液が腎臓の毛細血管からにじみ出て血尿となる。

そして、右の腎静脈は左のように血管に挟まれることなく心臓に戻る。このような現象は右の腎臓には起こらない。ナットクラッカー症候群は左の腎臓だけに起こる特異な現象である。腎静脈がくるみで、二股に分れて挟みつけている動脈がくるみ割り器とみなしてそう名付けられた。

これがナットクラッカー症候群の説明である。要するに血尿は血尿だけれども、出血がおびただしくて貧血にならない限り、治療も安静も必要もないし進行するものでもないのである。

「一〇年前の出血もナットクラッカーだったんでしょうか？」

「ええ、カルテから見る限り間違いないと思います。だけど、その当時は原因がよくつかめていなかったんですよ。今では原因もわかったし、もしも出血が止まらなかったらバイパス血管にリングを埋め込む手術をして圧を逃がせば大丈夫ですから、あまり気にしないで普通どおり活動していいですよ」

「ナットクラッカーが……」
「そんなことで一〇年間もビクビクしながら生きてきたのか」
とも思い、悔しかった。

ともあれこれで、長い間私の頭の片隅に住み着いて私に嫌がらせを続けていた犯人は遂に逮捕されたのである。と考えれば、やはり平成二年六月五日は私の栄光へ向かつてのスタートに『なるはず』の日ではなく、『なる』日と言ってもよいのかもしれない。

沖縄

九州大会は沖縄だった。夏の沖縄で試合をやるのはこれで三回目である。六月下旬の沖縄というのは暑い。古い話になるが、まだ沖縄がアメリカの統治下にあった頃、復帰することが決まった記念か何かで九州総合選手権大会が沖縄で開催された。期日は十一月の下旬。私は教員になったばかりで選手としてその大会に参加した。初めての沖縄訪問である。その時、試合が終わって私は仲間と海に泳ぎに行った。そして土地の人に聞いてみた。

「こちらではいつ頃まで泳げるんですか？」

土地の人は答えた。

「天気次第だけどね、年中泳げるよ」

二回目は昭和五七年だった。この時は奥武山の体育館で試合が行なわれたが、その体育館の裏に神社があつて、そこが林になっている。「そこは、時々ハブが出ますから気をつけてください」と脅かされた。暑い。とにかく暑い。市内から空港に向かう途中、電光掲示板に表示されている湿度が九〇パーセント以上だった。「暑いわけだよこれじゃ」みんなが口を揃えてそう言った。

そういえば、昭和五三年の山形インターハイは、フェーン現象のために气象台始まって以来の猛暑の中で行なわれた。道路のアスファルトが溶けてぬかるみになり、暑過ぎてセミが木から落ちてしまうような暑さだった。開始式では選手がバタバタと倒れ、みんなぐったりしている中で沖縄代表の辺土名高校の男子チームだけが元気で、あれよあれよという間にノーシードにもかかわらずベスト四まで勝ち上がってきたのを思い出す。

話を元に戻そう。二月の九州大会では準決勝で中村学園と当たり六三対五〇で負けた。この沖縄大会では同じ中村学園に今度は決勝で負けた。スコアは六八対五四。二月も六月も点差がほとんど変わらないうが、試合内容はまるで違う。中村も鶴鳴もひとまわり大きくなって見応えのある試合だった。そしてやはり、暑さが絡んだ試合だったのと、鶴鳴にとってはまだ神様が勝ち運を恵んでくれない戦いだった。その結果報告に私は次のように書いている。

平成二年六月二六日付 全九州高校総体結果報告（決勝 中村六八対五四 鶴鳴）

お気付きのことと思いますが、個人データはパソコン処理です。待ちに待って今月始めにようやく手に入れました。どこにでも持って行ける携帯用パソコンです。沖縄にも持って行きました。

さて、試合のことです。鶴鳴が強くなっていたのも事実ですが、予想どおり中村学園も小林も強くなっていました。小林戦での苦戦は別に取り立てて分析することはないので、中村学園との試合にしばらく報告します。

前半はモーシオンオフェンスの動きが悪いながらも点差で中村にくつついて行きました。最初のチャンスは前半残り五分に訪れました。鶴鳴が一点から三点の差でリードされて緊迫状態が続いていた時、山口(り)がステールに成功。誰もいないノーマークシュートを、今まさに決めようとした瞬間でした。山口は床に落ちていた汗に足を取られてドテーツと倒れたのです。

成功すれば一点のリードになり活気づくはずでした。このチャンスを逃した鶴鳴はこの後ちょっと集中力を欠き、前半終了直前に連続ゴールされて三四対二七と七点の差をつけられて折り返すことになりました。

後半は作戦を練り直して、浜口と松尾の二対二を主体にして攻撃を組み立てたら動きがよくなりました。そして一〇分過ぎに遂につかまえ逆転しました。四九対四八。さらに追加点のチャンスです。浜口のポストプレイ。ディフェンスがフロントポジションを取ったのでガードの松尾からフローティングパス。浜口ノーマーク！そこで、「ピーツ ファウル オフェンス！」審判のジャッジは浜口が脇で相手を押してボールを受けたというのです。

シュートはノーカウント。相手ボール。その直後に相手にスリーポイントを入れられてガツクリきました。二度のチャンスが二度ともファイになったのです。近差で終わろうとすれば終われたのですが、勝つためにプレスに出たのでいっそう相手にノーマークのチャンスが増え、返って差が開きました。

試合の経過はともかく、この中村学園との試合で今後のやり方の答えがはっきりと出ました。その答えは私自身前々から感じてはいたのですが、九州大会が終わるまでいじけなかったのです。問題点は、松山と松尾がほとんど外角シュートを狙わず、「点を取りたい」と思ったら浜口にボールを入れてしまうという試合展開になっていたということです。

三月頃は浜口がよくなってきたとはいえまだまだ不安定でした。それで五人全員のバスケットをやっていたのですが、このところ浜口の成長が著しく、点が欲しい時は浜口にボールを集めるケースが多くなっていたのです。それを私も黙認していました。

でもこれでスッキリしました。三月の時点でチームを戻せばいいのです。松山と松尾がもっとシュートを打てばいいのです。個人的には、ケガに泣いた田端がもう大丈夫という試合ができました。多少のもたつきはありましたが、ちょっとトレーニングを積めば解決できる問題です。

以上が九州大会の結果報告だが、個人々々のデータを見てみると、決勝までの四試合で最高得点が浜口の百十三点、次いで松山の六六点、他はほとんど一〇点台である。スリーポイントは岩永の十三分の二を筆頭に松山が六分の一、松尾が五分の〇、打った本数も少ないし確率も悪い。これでは浜口に負担がかかり過ぎて苦しい試合になるのは当たり前である。

仙 台

平成二年八月八日付 インターハイ結果報告(一回戦 秋田経法五七対五〇鶴鳴)

思い出したくもない試合ですが報告しないわけにはいきません。

秋田経法は三点シュートが武器だということは知っていました。でもグラフを見ればおわかりのよう

にそれでやられたわけではありません。ただただミスの連発でした。正直に言って今回はベスト四狙いでした。仙台に乗り込む前に名古屋と千葉で合宿をしました。ベスト四狙いを公言してはばからない成果をあげました。なにしろ、全国の強豪相手に全勝で合宿を終えたのですから。

九州大会でもそうでしたが、鶴鳴の課題はセットオフエンスが中心でインサイドに頼り過ぎ、外角ショットと速効にやや難があるということでした。その課題が全て解消されたわけではありませんが、かなり改善はされました。インターハイの一回戦敗退は、それが充分でなかったからだとは思いません。それでもベスト四は狙えたと思います。

問題はミスです。こんなに多くては勝てません。ボールをお手玉する。うっかりしていてボールをひっかけられる。目の前に落ちたボールを棒立ちで見ている。私はこんな試合を二度経験しました。ひとは二月の九州大会です。もうひとつが今回のインターハイです。「まだ若いからかなあ」と思う半面歯が立たないような実業団の胸を借りて接戦をすることがあります。

両方とも鶴鳴の実力だと私は思います。そしてそれを解決する方法はふたつあると思います。ひとつは遠征や招待で強豪チームと試合をたくさんやることです。もうひとつは選手一人ひとりの人間性をたたき直すことです。

私自身が自分の教育を買いかぶっていたところがあります。鶴鳴の選手はみんな分別のある立派な選手に育てたと思いましたが、やはり『新人類』の域を脱していない選手もいることがわかりました。具体的には、仙台の宿舎では消灯時間以後も灯りをつけて遅くまで話をしていた選手が数人いたということの後で聞かされたのです。しかも上級生の名かにそんな選手がいたのです。そんなチームは勝てません。

こんな厳しい勝負の世界に生きるものは、たとえ歳が若くても、苦勞をいっぱい積み重ねたおとな以上に分別をわきまえなければなりません。そのあたりからもういちど叩き直します。ご期待に添えず申し訳ありませんでした。

なお、一〇月の国体（もつとも、八月下旬の九州国体で勝たなければ出場できませんが）と、十二月の選抜大会の計二回、全国大会が残っています。それでなんとか屈辱を晴らして来年につなげたいと思っています。

私は大会がある度にその案内と結果報告をこつとして出す。対象は、学校の職員・保護者・卒業生・卒業生の保護者・卒業生がお世話になっている大学や実業団の監督・本校に來ている選手の母校の監督・その他お世話になっている先生方や協会関係者等々約百二十通ほどになる。「報告のコメントを読むのが楽しみなんですよ」多くの人からそう言われるが、今回だけは報告を書くのが苦痛で苦痛でたまらなかった。

パソコンの画面に向かってしていると試合の場面が甦り、怒りがこみあげてきて指先が先に進まない。負けたことに対してではない。コート上の選手の顔を思い出すと怒りがこみあげてくるのである。何におびえているのか、真っ青な顔でコートを右往左往している選手の顔を思い浮べると、怒りを越えて憎しみすら湧いてくるほどだった。

インターハイの帰りは東京で一泊してデイズニールランドで遊ばせることにしていた。選手も、負けて気が乗らなかつたかも知れないがキャンセルするわけにはいかなから予定通り出かけた。しかし、私は古い友人を訪ね、選手とは行動を共にしなかった。そしてその後、このことはずっと尾を引き、私はできるだけ選手と顔を逢わせる時間を少なくするようになっていった。

相田みつを著の『人間だもの』に感激し、少しは人間というものが見えてきたと思ってはいたはずの自

分が、また元の、焦り、苛立ち、いつも不愉快な顔をしている自分に戻ってしまった。

延岡

前にも述べたが、インターハイから帰ってきて第一強化練習を終え、今日から帰省という日の練習で松山が腰をやった。二回目である。これで松山はまた二ヶ月ほど実戦から遠ざからなければならぬ。もちろん、八月末の九州国体に出場する可能性はゼロである。本国体が福岡だから九州国体には福岡は出場しない。だから、出場権のことを心配することはない。しかし、インターハイの試合ぶりを振り返ってもわかるように松山に何より欲しいのはキャリアである。それがまた足踏みしなければならなくなる。それが痛かった。

平成二年八月二七日付 九州国体結果報告（決勝 鶴鳴六三対六〇熊本）

データを見ておわかりのように松山が出場していません。八月十五日の練習中に腰を捻りました。本人は、「前回のよりも軽いから二週間ぐらいで復帰できると思います」と申告しましたが、九州国体は二位でもいいから出場権を得ればいいと思って完全休養させました。こう言つと必ず「腰かあ、やばいな」と心配する人がいます。心配ご無用。ケガのことならまかせてください。一過性のただの腰部捻挫ですから。

インターハイ後遺症がずーっと尾を引いていた上にこの松山のアクシデントはいささかショックでした。黙って平静を装っていたけれど、選手もまたショックだったと思います。だけど、結果的にはそれがインターハイ後遺症をふっける要素になったのかもしれない。一人ひとりが「私がやらなきゃ」という気迫に満ちていました。

熊本選抜は強いチームでした。熊本は上位六チームが混戦状態で、それぞれのチームに一匹狼がいる。その一匹狼を選抜で集めたわけですから、それぞれがかみ合えばすごい力を発揮します。現に、インターハイベスト四の宮崎（小林）が前半で十五対三六と、手も足も出ないのでから。予選リーグの宮崎対熊本の試合を見ながら危機感を感じたのは事実です。でも、いざ決勝となるとまずリードマンの戦いで完全に松尾が相手のリードマンを封じてしまいました。相手のリードマンはふてくされて後半引っ込められたままです。

次にポストディフェンスでがんばりました。他のチームは熊本のローポストプレイで点を取られていました。だから、鶴鳴は相手のローポストプレイに対してディフェンスは徹底的にフロントポジションで守らせたのです。そのために逆に裏をやられたケースが数本ありましたが表でやられることに比べればそのダメージは比較になりません。

残り四分を切つて一〇点リードしていたのですが、村上（熊本商業）のスリーポイントが三本続けて決まったのと、熊本の捨身のゾーンプレスに大事を取り過ぎて攻めを躊躇したのとで点差が詰まりました。しかし、熊本が逆転するには時間が足りず、なんとか凌ぎました。

鶴鳴の力からして順当と言えば順当かもしれませんが、でも、インターハイ後のもやもやが続く中で、おまけに松山のアクシデントが起きたことを考えれば、それを跳ね返した選手達をあっぱれと誉めてやりたいし、みんなこのことで一步成長したと思います。

九州国体が終われば息つく暇もなく暮れの全国選抜大会県予選が行なわれる。県内の試合はもうどうやっても負ける心配はないが、常に次に続く全国大会とそこに登場するであろう強豪チームと戦えるか

否かのイメージを描きながらやらなければならない。ひとつとして息を抜けないのである。次がその結果報告である。

平成二年九月十一日付 第二回全国選抜大会長崎県予選結果報告（決勝 鶴鳴六六対五四長崎商）
山口（二年 横尾中出身）、山口（一年 深堀中出身）、一瀬（一年 長与中出身）の三選手にうまくなってもらいたかったのと、田端（三年 佐世保清水中出身 ケガで長い間実戦から遠ざかっていた）と岩永（三年 佐賀諸富中出身 貧血の治療が完治した）にもう少し実戦の場数を踏ませておこうと思つて特別の布陣で臨みました。

一瀬はもう大丈夫でしょう。これから実戦を経る毎にうまくなると思います。岩永はまるで別人のようです。話題が試合から離れますが、岩永は先日のロードワークで往路は先頭集団についてくる粘りを見せたのです。それまでは、ロードワークといえば最初から圧倒的に遅れるか、遅れ方があまりにもひどいから他の選手の半分にしてやっていたほどです。変われば変わるものです。

田端はまだ実戦とトレーニング不足です。仕方ありません。山口（二年）は度胸をつけさせなければなりません。そのためには、もっともっとみじめな目に逢つてそれを跳ね返す努力を積む必要があります。みじめさぶざまさの中から自力で這い上がつてこなければ力は付かないのです。どうか、手を差し伸べるのは無用に願います。

山口（一年）はまだまだバスケットボールというものをたくさん勉強しなければなりません。まだヒヨコにもなっていないません。卵の殻を割りかけたくらいです。本人がそのことを自覚し始めたら強くなるでしょう。

それにしても、決勝戦では安全を考えて終盤に浜口を投入しなければならなかったのが残念です。県内の試合では浜口と松山を出さずにやりたかったです。全国を狙うのであれば「あんなたちは今回はベンチで見えていなさい」といつぐらいの気概を周りの選手が持つて試合に臨んで欲しかったです。遠くは全国のトップレベルをしっかり見詰め、近くは自分自身をしっかり見詰め、練習で、試合で、起こった現象のひとつひとつを自分のものとして取り込んで成長の材料にして欲しいと思います。

とびつめ国体

平成二年一〇月二六日付 第四五回国民体育大会結果報告（一回戦 聖和七四対六八鶴鳴）

松山を交代させるタイミングが二度スレて本人に負担をかけ過ぎたこと。

浜口が前半で四ファウルして、そのことに気を使わなければならなかったこと。

相手のトランゼイションの速さに慣れるのに時間がかかったこと。

以上三点が勝敗を決したポイントだと思います。

試合の流れをもう少し細かく言いますと、立ち上がり九分過ぎたところでスコアは二二対十三と鶴鳴がリード。しかし、その直後に浜口の三回目のファウル。安全策を取り、前半はこの貯金を食い潰して面白いという判断で浜口をベンチに下げました。すると五分間でこちらが二ゴールを決める間に相手は怒涛のように走りまくつて八ゴール奪取。鶴鳴は逆転され四点のビハインドとなりました。ここで一ゴールでも入れれば落ち着くと思つて浜口を投入。ところがゴール成らず、しかも浜口が四回目のファウルを取られてすぐまたベンチに下げました。

後半は、浜口が四反則を気にして動きに少し切れがなかったものの今度は松山がふんばりました。開始後、松山が三ゴール奪取、合間に浜口が二ゴールを取るという理想的なパターンで試合を進めまし

だが、走りにリズムのついた聖和は一〇番相沢が当たりに当たってしびとく抵抗。点差は三点から五点の聖和リードのまま進行。

そして遂に、後半残り五分で浜口がブロックショットに行った時ファウルを吹かれて五反則退場。この時点でスコアは六八対六二と聖和六点のリード。ところがその後、松山・山崎・松山と三連続ゴールして六八対六八の同点。

そして…。

残り時間一分十五秒で聖和が一ゴール入れ、七〇対六八となっていよいよ正念場。エンドラインからスローインされたボールを松尾が持ち、相手のオールコートタイトディフェンスを抜こうとしてフェイクした瞬間、コートに落ちていた汗に足を滑らせて転倒。その場にころがったボールを難なく拾って相沢が楽々レイアップ。ここで勝負が決まりました。

悔しい場面はありましたが、インターハイの時のように選手のふがいなさに腹が立つような試合ではありませんでした。浜口の五反則に対しても「おまえ、またいつものパターンか」と、皮肉っぽく言う気にはならない五反則退場でした。むしろ同情したほどです。これまでの彼女に比べて、動揺を抑え冷静に持ちこたえたと思っています。

確かに華奢な感じはしますが、単に練習量を増やしたりハードメニューを多くすれば解決するとは思いません。それはそれで私も考えています。これで、インターハイ・国体・選抜の三つのうちふたつが空振りに終わりました。残る選抜大会で三振しないよう、粘りに粘って少なくとも二塁打ぐらいは打つて来年につなぎたいと思います。

「鶴鳴と名短の試合を見に来ました」というフアンの人達と顔を合わせるのがとても辛かったです。

こうして、本国体もインターハイに続いて初戦で負けた。しかし、内容はインターハイに比べるとまるで違っていた。報告書にも述べているとおり、浜口は自己管理ができるようになっていた。他の選手達もそれぞれがんばった。

問題は松山だった。腰痛は治ったが練習がほんの間に合わせ程度にしかできていない状態での出場だったので身体の切れがなかった。そのために連続ミスが出て、可愛そうな思いをさせてしまった。総合して、インターハイに比べると悪いではなかったが、私の心の中にずっと住み着いている重くどろどろしたものは依然として住み着いたままだった。

その重苦しくてどろどろしたもののひとつは、『このチームは絶対に全国優勝させなければならぬ』という気持ちであった。インターハイ以後ずっとそれは住み着いており、だんだん大きくなってきていた。だから、バスケットを教えていて楽しくなかった。いや、教えていてというよりバスケットそのものがまったく楽しくなかった。

『勝たなければならぬ』という意識が根底にあるから、それを基準に選手を見る。すると、ふがない一面しか目につかない。それに腹が立って選手を罵倒する。そういう自分が嫌で仕方がなかった。本当なら、こんないい選手達を獲得できて、バスケットが楽しくてたまらないはずなのに、そんなことの繰り返しで私の心は日増しに荒んでいった。

国体から帰ってくるとすぐ長崎地区新人戦が行なわれ、さらにひと月後県下新人戦が行なわれた。選抜大会が年末に行なわれるようになってから、インターハイ後のチーム運営がとも忙しくなった。こうして、新チームの試合もこなしていかなければならないし、三年生を含めた国体や選抜大会の練習も

しなければならぬ。

それも、今年はまだいい。チームの主力が二年生だから二本立てではなく一本立てでやれる。しかしこれは特例であって通常はインターハイ以後は完全な二本立てでやらなければならない。そのことももう気になりかけていた。その新人戦の結果報告である。

平成二年一〇月二九日付 長崎地区新人戦結果報告（決勝 鶴鳴六九対五一純心）

松山・浜口・松尾・山口（り）のスタメン組は前半だけであしまい。山口（み）・白浜・川原・松下にうまくしてもらいたいと思い、たくさん出場させました。一瀬は一年生だからスタメン組と特訓組の両方かけもちで出しました。

松山は現場を離れていた勘を取り戻させるためと、情けないプレイぶりに腹が立ったのでスタメン組では出場時間が長くなりました。その結果、

白浜は浜口のバックアップとして期待できるまでに成長しました。

試合を冷静に観察してみると、松尾・松山・浜口・山口の二年生四人がもう一段階向上してたくましくならなければ全国優勝は無理だということがはっきりわかります。

日本一を狙うような人間は、歩く姿から顔つきから風格が感じられるものです。この四人からはまだ、一年生を引っ張ってやるような實績は感じられません。

川原を決勝戦の途中でベンチから追放しました。場外追放です。自分より力が劣る相手に対して腰を引いてプレイをしていたからです。日本一を狙うのは前述の四人だけではないんです。全員が自分に厳しく、自分達がやっていることに誇りをもってやらなければならないんです。

川原がかわいそうだとも思いかも知れませんが、どうか声をかけないでください。自分で這い上がってくるはずですから。

平成二年十一月二〇日付 県下新人戦結果報告（決勝 鶴鳴一九九対二四西海学園）

なぜ？どうして？いつまでたっても自立できないのでしょうか？ちょっととしたミスの動揺が尾を引きます。わずかな場面の变化にうるたえます。私がアドバイスをしてやると安心したような顔になるのに自分では見つけようとしません。困ったら同情を誘い、おとなが手を差し伸べてやるのを待っている選手の顔を毎日見るのもうつろいざりです。

まだ若いとか、対外試合が足りないとか、もはやそんなものではありません。選手の肉体的な問題です。やるなら勝った時に選手と共に喜べる毎日を送りたい。だから、私は徹底的に選手の人間性のもろさを追及します。それで押し潰されるようなら所詮はそれだけのチームなんです。

この、県新人戦の結果報告の文章に、その頃の私の荒んだ気持ちが見事に表れている。私は本当に、腹が立つというより憎しみに近いような感情を選手に抱いていたのである。それもこれも、すべてが『勝たなければならぬ』という意識から生じたものだった。

駅伝

私は四九才（平成三年現在）だが、まだグラウンドインターバルやロードワークは選手と一緒に走る。そして、いつも私が一番速い。五千メートルも二万メートルもロードワーク（十二キロ）も、私の最高記録をまだ選手に破られたことがない。それも、松尾朋子が現れてからは事態が変わった。

松尾は中学の時も駅伝の選手に選ばれたほどで、入学してから一年生の中でひとりだけ、ロードワークの時にトップ集団について走ってこれる選手だった。

新入生ながらトップ集団について走れる選手は松尾だけでなく過去にも何人が居たから取り立てて騒ぐことではないが、半年も過ぎると私も危機感を感じるようになってきた。それまでの選手はいくら速いといっても後半は振り切られていたのに松尾は最後まで私と競り合うようになってきたのである。そして遂に、松尾が二年生になる前の春、ロードワークで私の記録を破られた。

それまで、私はみんながスタートしてから五分ぐらい遅れて、ウォームアップなしでいきなり走りだし、途中の様子を観察しながら走ってゴールはトップで悠々と入ってくるというパターンだった。

しかし、この時は私も真剣だった。入念にウォームアップを行ない、本物のレースに出る気持ちで臨んだ。私は終始松尾の息づかいや足の運びに気を配りながら走り、残り三キロを過ぎた頃にスパートをかけてみた。松尾はついてこない。約二メートルぐらい先行し、松尾の気配を感じながらしばらく走ったが、松尾に余裕はない。

「よし、勝負だ」

私はそう思ってそのままスピードを上げ、ゴールに向かった。鶴鳴のロードワークのコースは折り返してからはずっと登り坂で、坂道を登りつめると残り一キロ半が下りになっている。その、登り坂の頂上で後を振り返ると松尾は百メートルほど遅れてついて来ていた。

「勝った！ まだまだ俺も大丈夫だ」

私はホツとして下りをひたすらゴールに向かった。頂上で振り返ったあとはもうひたすらゴールすることしか考えていなかったので振り返ってもみなかったが、ゴールまで残り四百メートルになった頃私はドキッとした。タッタタッタとうしろから足音が聞こえるのである。

「エーッ うそー」

と言いながらうしろを振り返ると、もうすぐそこに松尾が迫っている。その後の勝負は、私の背中をじっと見ながら迫ってきた松尾の気力と「もう勝利は間違いない」と思っていたのに慌てさせられた私の気持ちとは、残り四百メートルで三メートルリードしていることなど何の足しにもならない。

ゴール二百メートル手前で松尾は私を一気に抜き去り、遂に私の記録を書き換えてゴールした。私も松尾に引つ張られて自己記録を更新したが、この日以来もう松尾には勝てなくなっただけでなく走る度にその差は開くばかりだった。

松尾以外にも速い選手は多い。過去にレディースロードレース大会に参加したことが数回あるが、陸上競技の長距離専門の選手達にこそ勝てなかったが数人の選手が毎年必ず入賞していた。レディースロードレースが始まった頃、出場選手が少ないことを懸念して主催者から要請されて出場してはいたが今では出場者を整理するくらい規模が大きくなってきたのもうそんな大会には出ない。

ところが今度は学校から要請があった。陸上競技の高校総体駅伝の部に出場してくれというのである。陸上部はあるのだがこれまでなかなか強化が実らず、短距離や投的等人員の揃う種目にだけエントリーして出場していた。それが、昨年陸上専門の常勤の教師を採用し、陸上部を強化していくことになったのである。

強化するには宣伝をしなければならない。そこで駅伝大会に出場して名を売ろうということになったのである。しかし、陸上部には長距離の強い選手がいない。それでバスケット部に協力を要請されたわけだ。その結果報告である。

平成二年十一月七日付 県下高校総体駅伝競争大会結果報告(三四チーム中 第七位)

一区 松尾 大会タイ記録を出すが順位は八位。大健闘

各学校とも一・二区に切り札を配置する中、トップグループで走れたのと大会タイ記録を出せたのは立派である。

二区 藤原 区間九位の記録だったが順位は七位に上げ三区にたすきを渡す。

本番直前に四区から二区に変更させたために試走なしのぶっつけ本番。

三区につなぐ時にまごついて六位で渡せるところ七位になった。かわいそうだった。

三区 川原 区間七位の快走。そのまま七位キープで四区につなぐ。

四区 浜口 区間一〇位の記録で順位は七位のまま最終区につなぐ。長距離の選手といえばみんな痩せていて小柄なのに、一八三センチの浜口はさすがに沿道の人々を驚かせた。

五区 池田 区間十五位の記録。気温がぐんぐん上がり、走りが苦しそう。彼女本来の走りではない。ゴール間近、後から宇久高校が迫る。スタッフおよび補欠全員沿道に出て応援。池田、歯をくいしばり七位キープのままゴールイン。

陸上競技部を強化していくという宣伝の意味で学校挙げて協力し、参加した大会でした。だから、遊び気分やひやかしでなく、みんな真剣に取り組みました。初出場で七位というのは十分に宣伝になったと思います。

緊張しました。バスケットボールの試合と違って、目の前に選手がいません。各中継所に選手を配置したらあとはラジオを聞きながらただじっとゴールを待つだけ。選手に話しかけることもアドバイスしてやることも何もできません。いろんな意味で勉強になりました。

選抜

平成二年度の大会はインターハイも国体も一回戦で敗退。前評判だけが高くて期待はずれの結果に終わっていたので、人に逢うのが怖くて…バスケットのことが話題になるのがいやで…そんな日々をインターハイ以来ずっと送ってきた。

選抜の組み合わせが十二月三日にわかった時、「天が我々に味方したぞ」私は選手にそう言った。

一回戦の相手は、失礼な言い方だが初出場ではあるしあまりうるさそうなチームではなかったので一回戦は勝ち抜けると思ったからだ。インターハイも国体も、一回戦ではコチコチになって何もできないまま負けてしまったので、一回戦さえ勝ち抜いて大会の雰囲気慣れてくれれば二回戦からは本来の力を出してくれるのではないかと思っていたのである。

最初の難関は三回戦の聖和学園だった。二ヶ月前の国体で惜敗している。その時はガードの相沢に三九点も取られている。国体が終わってもずっとそのことが気になっていたが、ある日突然気がついた。相沢に松尾をつけたのがいけなかったのである。試合中に気がつけば或いはなんとかなったかも知れないのに、あとからこうして気がついたことがとてもつしろめたく感じられた。

相沢のように脚力を活かしてスピードで勝負してくるタイプには、鶴鳴ではもっとも脚力のある山口をつけた方がよかったのである。山口は器用ではないけれど、単に跳ぶとか単に競争するとかいう場面ではチーム随一だ。一方松尾は、スピードは山口と互角だが技が多彩である。その多彩さが弱さとして表れる局面があるのだ。それが弱さとなって表れてくるのは特にディフェンスにおいてである。

しかし、松尾のすばしっこさが頭に焼きついている私は、それにこだわって相沢に松尾をつけるのは

不利だと気がつかないまま試合を終わってしまった。それで、組み合わせが決まった時にすぐ、「選抜の聖和戦は、相沢にはリカだぞ。トモじゃないぞ」と言った。

その時、「国体は俺の作戦の失敗だった。途中で気がついてトモをリカに替えるべきだった」と謝ればよかったものを、なかなか勝てない苛立ちに加えて選手に憎しみさえ感じていた私は素直にそのことばが出なかった。

作戦は成功した。山口は相沢を抑えてくれた。それでも二五点取られたが、試合を見ていた大学や実業団の監督達が口を揃えて、「今日の殊勲賞は山口だな」と言ってくれた。六三対五六の辛勝だった。

準々決勝の相手の東亜学園は、今年度の練習試合では一度も負けていない。だから勝つ気で試合に臨んだ。勝ってベスト四に入るつもりだった。しかし、公式戦では何が起るかわからない。主砲浜口の早々の五反則退場。さらに終盤の勝負所で今度は松山が五反則退場。ここで勝負が決まった。

しかし、この大砲二失った後の選手の粘りがすごかった。残り十三秒で田端がスティールしてレイアップに持ち込んだ時には「あわや！」と思う一幕まであった。だが、気持ちが焦っている田端はそのノーマークレイアップシュートを落とす。結果は六四対六〇だった。

その夜、宿舎で簡単なミーティングをした。ミーティングをした理由は、試合の反省やこれからの方針を述べようと思ったからではなく、選手達にお礼を言いたかったからである。特に、田端や岩永達三年生に「ありがとう」と言いたかった。

みんなが鶴鳴のことを、来年のチーム来年のチームと言って騒ぐ。三年生たちは「私達だってがんばってるんだよ」と言いたくなるだろう。そう思うとどうしても、この試合ですべてが終わる彼女達のがんばりに対して一言感謝の気持ちを述べておきたかったのである。

一方では、自分は全国のバスケット関係者の注目を浴びていると知っていながら、大事な試合で五反則退場してしまい、責任を感じているだろう松山と浜口の気持ちを労ってやりたかった。

「これだけがんばってくれる仲間がいるんだから、これからは責任感で自分を縛りつけないで、もっと伸び伸びプレイしようよ」

松山と浜口に向かってこう言った途端、私は不覚にも涙を落とした。

自分が言ったそのことばに、「勝たなければならぬ」という責任感で縛りつけられている自分がダブリ、三年生の気持ちを思い、さらに、最後の試合でなんとかベストエイトにぶら下がって面目を保てた安堵感が交錯して感極まってしまったのである。

ON AIR

年が明けて一月。もう三年生が出る試合はない。いよいよ噂の中心であった松山や浜口が最上級生となつての全国優勝狙いがON AIRである。その最初の手始めが全九州高校春季選手権の県下二次予選であった。その報告が、その後の一年間の鶴鳴の重要なポイントを示唆している。

平成三年一月二二日付 九州高校春季大会県下二次予選結果報告（決勝 鶴鳴一一三対五六西海）

ここしばらく、松山と松尾が不調続きです。原因は、ふたりともシュートに向かわなくなっていたからです。鶴鳴のオフエンスが知らず知らずのうちに、浜口にいかにもボールを集めるかということが主体となってしまうていました。

気がついてみると、松山と松尾が自分のシュートチャンスなのにアシストにこだわって攻めないのです。だから、東京から帰ってすぐ、練習の全てをこのふたりのためのメニューに切り換えました。その結果、松山はこの二次予選で少し戻ってきました。しかし、松尾は戻らずじまいでした。よく見てみると、シュートチャンスにためらいがあるのも事実ですがシュートフォームに問題があることがわかりました。

そこで、女子決勝が終わってすぐ、私とマネージャーの眞鳥と松尾は学校に戻って松尾のシュートフォーム改造を試みました。一時間ほどやっている、だんだん松尾本来の安定したフォームに戻ってきました。本人が感じをつかんだようですから来月の九州大会までには本来の松尾らしいシュートフォームに戻っていると思います。

浜口が純心戦で転倒し、したたかに腰を打ったので決勝は少ししか出ませんでした。痛みは激しくても単なる打撲だったので大丈夫です。山口（り）が決勝戦で選抜大会後の合宿で痛めた足を再び痛めました。X線検査の結果異常はありませんでした。リスフラン関節の捻挫です。以上、試合を見てくださった方々に心配をおかけしましたのでお知らせいたしておきます。

そして一ヶ月後、九州大会が行なわれた。

平成三年二月十九日付 全九州高校春季選手権大会結果報告（決勝 鶴鳴八四対六一中村学園）

新聞の記事で知ったのですが、鶴鳴の九州大会優勝は十四年ぶりだそうです。昭和五三年、川井や熊谷達の時に優勝したと思っていたのですが、私の勘違いでした。となると、昭和五年の下田達以来ということになります。じつと辛抱して待ち、応援を続けてくださった方々に心からお礼申し上げます。

今年の全国状況は、名古屋短大附属を頂点に、鶴鳴・東亜・中村・小林あたりがトップ集団を形成していくレースになると予想されます。そうです、九州は昨年に続いて全国でもトップレベルのプロックなのです。そんな中で、まず鶴鳴が好スタートを切ったということは非常に大きいと思います。

今大会を顧みて、チームの構成メンバーのバランスから見ると中村と鶴鳴がやはり他を一步リードしています。次が小林でしょう。選手層から見れば互角の試合になるはずなのに中村学園との点差がなぜ二〇点も開いたのか。私の感想では、中村学園は昨年度の地元国体の責任を果たしたのと、選抜で好成績を収めた安堵勘がまだ尾を引きずっていたのだと思います。

だから、次の九州大会では国体と選抜の後遺症も治っていると思いますのでもっと緊迫したゲームになると思います。その準備はもう今日から始めます。

個人的には、松山は九〇パーセント復調。松尾はシュートに関しては八〇パーセント復調。特に、鹿児島女子高戦で三連続スリーポイントを決めてからぶっ切れたようです。ただ、決勝戦ではカーッとやって自分を見失ってしまう若さが出ました。でも、自立しなければならぬと思って自分の心の中で戦っているのがよくわかります。もう少しで大丈夫だと思います。

山口理香の足はまだ完治していません。少し足を引きずって走ります。今まではそんなことに弱かった山口ですが、これも選抜大会の自信でしょう。落ち着いて試合ができました。

一瀬はゴールに向かうのが何よりいいです。でも、小林戦では打てどもスリーポイントが入りません。「いいよー！思い切って打てー！」とゲーム中は励ましていました。心の中では、「もう少し入れてくれたっていいじゃないか。これだけ打たせてるんだから」と思っていました。

川原・白浜・山口（み）も公式戦で充分責任を果たせるまでに成長しました。観客席でささやかれていた声を最後に紹介します。

「鶴鳴って、四番と五番はすごいって聞いてたけど、みんなつまいじゃない」
四番と五番というのは、松山と浜口のことです。

以上、九州大会の県予選と九州大会の結果報告だが、松山と松尾のための練習というのは特別に変わった練習ではない。三対三や四対四や五対五の練習である。ただ、練習のデータを松山と松尾だけに絞ってパソコン処理をするだけだ。そのデータはシュートに関するものに限る。松山と松尾が何本シュートを打って何本入れたか、それを実数で示し、パーセントで表し、他の選手との比率を出し、グラフ化して毎日体育館の壁に貼り出すのである。

その結果、松尾と松山は自分のシュートに対してかなり意識してプレイするようになり、それに比例してチームは安定度を増していった。

韓国遠征

三月下旬、開校以来初めての海外遠征をした。お隣の韓国である。何もかもが初めてなので面食らうことばかりである。試合のことやことばや習慣の違いのことが心配なだけではない。それ以前に、海外遠征をする時は日本協会に申請しなければならぬとか、手続き上のいろんなことやお土産を何にするか等、そんなこんなでずいぶん神経をすり減らした。

その韓国遠征の報告である。

一 戦績	三月十八日	鶴鳴	七六	対	七六	仁聖
	一九日	善一	七一	対	五八	鶴鳴
	二〇日	鶴鳴	五七	対	四八	崇義
	二二日	鶴鳴	六一	対	五六	成徳

二 内容 仁聖、善一はともに昨年一昨年と韓国チャンピオンを争ったチームです。

一日目は鶴鳴も善戦しました。しかし、二日目の善一戦では三時間のバス移動と初めての海外遠征の精神的な疲れだと思えますが、まるで仁聖戦とは別人のような試合でした。SKCの林コーチからも「どうした？ 疲れたか？ 昨日みたいな試合ができれば今日も一〇点は勝てたのに。ま、初めてだから仕方ないよ」と慰められました。

三日目の相手はベストエイトぐらいのチーム。最終日はベスト四ぐらいのチームだったのですが、鶴鳴は三日目もまだ重く、最終日にはようやく少し動けるようになりました。お世辞半分だと思えますが、「韓国に来てこんなに善戦したチームはいままでにないよ」と関係者から誉められました。

おもしろいことがありました。最終日、成徳のセンターは浜口にファウルばかり。しかし、五反則になっても退場しません。通訳の金さんに聞いたら、「控え選手がいらないからそのまま出すと言ってる」と言われました。そして、終了時にはとうとう九反則でした。もうひとりの選手も五反則しましたが退場しませんでした。

聞けば、ガードとフォワードがケガをしていて試合ができないからだと言っていました。試合前のウォームアップの時は同じレベルの選手が十二人で練習していたのに、不思議でした。後半、タイムアウトを三回とって平気な顔をしていました。

初戦の仁聖に引き分けたのは韓国の関係者にとっても驚くべきことだった。韓国の高校生と日本の高校生のレベルの差は、日本国内の実業団と高校の差くらいはあるといわれている。出発前に、「初めてだろ？ 目がまわるぞ。あの連中の速さに慣れるまでに時間がかかるんだよな。ま、勉強になるよ」と、共石の中村監督が言った。それくらい強いぞということだ。

「私達はどんなに自分のチームが弱い時でも日本の高校生には負けたことがありません。おそらく、韓国のチームにこれだけの試合をした日本の高校生チームは鶴鳴が初めてではないでしょうか」「仁聖のコーチからもそう言われた。

外交辞令が半分はあると思う。しかし、日本から様子を見について来た中村監督・SKCの林コーチそれに林監督等々、バスケットの専門家が口を揃えて鶴鳴のバスケットを誉めてくれた。それで元気が出ないわけがない。

初めは無我夢中でいろいろ考える暇がなかったが、後になって思い出しながら考えてみると浜口以外の選手が全員自分のシユートチャンスを積極的に狙っていたことが善戦の大きな原因だった。松山と松尾の特訓が韓国に来て実を結んだのである。

しかしそれは、選手がそのことを意識してプレイした結果ではない。韓国のバスケットがあまりにも速いから、それにあおられてこっちの選手の動きも速くなり、結果的にとにかく自分の仕事をさっさと済ませてしまおうとするバスケットに変わっていったのである。

選手達が仁聖の選手の家それぞれ招待されて夕食をごちそうになった時、お互いにそれぞれの国のことについて質問をしたそうだが、仁聖の選手達は二時間目の授業が終わったら昼まで二時間の練習。五・六校時はまた授業を受けて、放課後に四時間の練習をするということだった。この練習量の差が日本と韓国の速さの差になっているのかなあと思ったがそれ以上のことはわからない。

韓国の選手は速いだけでなく、ボールを扱う技術が巧い。キャッチ・パス・ドリブル・シユートのどれをとっても日本と格段の差がある。それも練習量の差か？「授業を他の生徒と一緒に受けないで、進路に困らないんですか？」と聞いたら「バスケットで入ってくる選手達は皆、バスケットを通じて大学や実業団に推薦してもらったから、バスケットで力をつけることが大切なんです」と、仁聖の校長先生は答えた。日本の部活動とはまったく違う、いわばプロ集団である。

仁聖の沈コーチも学校の先生ではない。コーチで給料をもらっているプロコーチである。だから選手も十一人しかいなかった。日本の部活動のように下級生の補欠がズラッと並んで声を張り上げているとか玉拾いに走り回るといふ光景はない。

単に所属しているだけという選手はいないのである。これは、崇義と成徳についてもまったく同じだった。ただ、善一だけは選手が三〇人くらいいた。しかし、時間のゆとりがなくてそのあたりの事情を聞く暇がなかった。

わずか一週間ほどの韓国滞在だったが、指導者と選手の犠牲的精神に支えられている感じがまだまだ強い日本の部活動とプロ意識の韓国との差がはっきりとその競技力の差となっているのは間違いない事実だと感じて帰国した。

ハンスアップ

私は選手を指導するにあたっては、実戦の心理や周囲の者の心理を加えて教える。試合をしている相手の選手が何を考えているか、こんな時はどんなことを心に思っているものなのか、観客はどんなこと

を考えて試合を見ているのか、審判はどんなことを考えるのだろうか、ということについてである。自分だけのことしか考えられない選手は自分の力を充分に出せないと思うからである。

「こんな時、相手の監督は何を考えるんだろうか」

「こんな時、観客はどんなことを考えるんだろうか」

「こんな時、審判はどんな気持ちになるんだろうか」

そんなことがわかるということは、自分の力を思う存分発揮するのに決して軽い問題ではないと思う。中でも審判の心理については練習の中でしばしば教える。

「審判もね、ただ笛を吹いているだけじゃないんだよ。審判しながら、『あいつ、バスケットのこと何もわかつたらんなあ』とか、『あいつなかなか賢いなあ』とかいろいろ考えるんだ。でね、例えばあるチームのセンターが制限区域でつろつろしているとすると、審判もそいつを気にしているわけだ、もうちょっとで三秒になるという時にね、サツと急いで出る選手だとね『あいつ、わかつてたんだな』と思って気持ち良く審判ができるけどね、のろのろ出るやつがいるとね、もしそれが三秒ギリギリでセーフになったとしても『偶然制限区域の外に出ただけで、あいつほんとに危なかったって気がついてないんじゃないかなあ』と思ってあんまりいい気持ちがないもんだよ。特にファウルの時なんかそうさ、自分はめっちゃくちゃなプレイをするくせに、相手チームにちよつと際どいプレイがあると『ファウルだ!』とか『歩いたじゃないか!』とアピールする選手がいるね。あんなのほとんど審判やっててバカにしているんだよ。心の中ではね『もう少しバスケットの勉強してからユニフォーム着てこい』とかね。試合というのは選手と審判で気持ちよく運営して行くものさ。選手にも審判にもしくじりや見損じがある。それを目くじら立ててつつきあうんじゃないかってねお互いにカバーしあいながらやるんだ。すると試合は面白くなる」

平成三年度からルールの一部が変わった。私はそのようにルールが変わる時には特別に時間を割いてチームに講習会をやる。ルール改正後の審判は特に神経質になっているからだ。

「今度の試合はな、審判も神経質になっているからビービー笛を鳴らすよ。特にハンドチェックに対しては『たったこれくらいでか?』というのまでとるはずだから、こっちの方から逆に審判に教えてやるくらい手の使い方は正しくやろつ」

そう言って、ルール改正でコート上のプレイにもっとも影響があると思われるハンドチェックについて、特に念入りにやった。それで、練習ではもう一度ハンスアップから見直し、意識して練習するようになった。特にポストディフェンスの時の手の使い方とディナイしている反対の手の使い方は厳しくチェックした。

「『私たちは正しい手の使い方じゃありません』って、そういう態度でプレイをするよね、審判にもきつとよく勉強しているのがいて、そんな審判は『鶴鳴の選手は新ルールがしっかり身についているよ』とわかるはずだ。すると鶴鳴のバスケットの印象がよくなるだろ。その、印象がよくなるということが大切なんだ。印象がよくなるというのは審判に笛を吹かれたら文句を言わずに素直に手を挙げるといことではなくて、審判とともに試合を気持ちよくやっていこうとすることなんだよね。審判と選手が互いに『よくわかってくれているな』と感じながらやれるようになると試合が楽しくなる」

そう言って始めたハンスアップの見直しは思いがけない結果を生んだ。五月の連休に徳島県の招待で

遠征に行った時、関係者のみんなが鶴鳴のハンズアップを絶賛したのである。「鶴鳴のハンズアップはすばらしい」「鶴鳴のディフェンスはすごいよ」みんなからそう言われた。もともと新ルールに対応するための見直しで始めたことなのに、関係者は「鶴鳴はずいぶんディフェンスの練習に力を入れてきたんだろ」と勝手に思っている。

言われてみればほとんどのチームが鶴鳴のディフェンスを攻めあぐんでいるのである。フットワークをたくさんやったわけでも、ディフェンスの練習に時間を割いたわけでもないのにこんな結果になるとは思いもしなかった。基本的に忠実であることがいかに大切であるかを改めて認識させてくれたことであった。

なんじゃもんじゃ

徳島遠征から帰ってくると、私にとっては大変なことが起きていた。体育館の玄関の前に植えてあるなんじゃもんじゃの木に花が咲いているのである。この木は原田五月の義兄である松村氏から七年前前に貰って来た木であった。本当の名前はヒトツバタゴと言うのだそうである。対馬の鰐浦地区と長野県の一部にしか自生しない天然記念物の木である。

春、対馬の鰐浦に行くと山が雪をかぶったように真っ白になっている。それはヒトツバタゴの花が咲き誇っている光景である。金もくせいや銀もくせいの仲間の木で真っ白の小さな花をいっぱい咲かせる。その苗木を鉢植えにして貰ってきた。最初は鉢に植えたまま、少し大きくなったら中庭のつつじの脇に植え替え、一メートルを越えると今度は体育館の玄関前のメタセコイアのそばに植えかえた。

それがもう、私の背丈以上に大きくなっていった。その木のでっぺんに白いものがついている。近寄ってみると幹の枝の先端に花が咲いているのである。

「おい、みんなちょっと来い！ ほら、花が咲いたぞ」

私は選手にそう言っておおはしゃぎしているが選手には何がそんなに大変なのかわからない。当たり前だ。その木の由来も何もわからないのだから。

「この木はな、なんじゃもんじゃの木と言って対馬の鰐浦と長野県の一部でしか花を咲かせない木なんだ。七年ぐらい前に対馬から貰ってきた。ここに移し変えたのは四年前かな。対馬から持ってきた天然記念物の木に初めて花が咲いたんだ。縁起がいいとは思わんか」

私はそう説明しながらひとり興奮していた。

三月の韓国遠征で、自分の攻撃を後回しにしてアシストばかりを狙っていた松山と松尾の問題が解決した。五月の徳島遠征ではディフェンスで思わぬ収穫があった。帰ってくると、なんじゃもんじゃの木に初めて花が咲いていた。何かこう、全ての事がうまく回り始めたような気がしてものすごく嬉しくなった。

なんじゃもんじゃの木に限らず、私は縁起を担ぐ。いい試合をした時は、そのツキを逃がしたくないでその時着ていたシャツをそのまま翌日も着る。だから勝ち進んで行くと最後には汗でべとべとになったシャツを着ていることもある。

私は物事に取り組むときに、どちらかという心理屈である。他人から言われたことをそのまま正直にやることはない。なぜ、どうして、と考えて理論的に答えが出た事しか実行に移さない。そんな私なのに、「神様お願いします」と心の中でつぶやいたり、出かける前にシャツのボタンがプツンと取れたりすると、目の前に控えている試合に結びつけてふと不安になったり、現実主義のくせにつまらないことにこだわる変なところがある。

さて、超大物達はいよいよ三年生になった。これからひとつひとつが高校生最後の試合になっていく。全国につながる最初の試合であり、学校を挙げてみんなが燃える高校総体は六月一日から四日までだった。前にも述べたが、これから一年間地元の放送局のK社が鶴鳴を追う。決勝の前日である六月三日。試合が終わって誰もいなくなった体育館で作業が始まった。翌日の決勝をテレビ中継するためのセティングである。私も遅くまで残って立ち会ったが、作業している局の人達の表情は重い。

その日、雲仙の普賢岳で大火砕流が発生した。全国各地から報道関係者が雲仙に集まり取材をしていた。誰もが少しでも迫力のある映像を撮ろうとして危険を承知で普賢岳に接近する。そんな中で発生した大火砕流は多くの犠牲者を出した。

もちろんK社もスタッフを現地に派遣して取材活動をしていた。その中のひとりであるSカメラマンが消息不明なのである。昨年から私もK社のスタッフとは共に仕事をしたからS氏もよく知っている。気になった。セティングは夜の八時頃終わった。やぐらを組み、モニターテレビがセットされた放送席をじっと見つめながらアナウンサーのM氏が、「放送できればいいけどな」と、ため息まじりでつぶやいた。

翌朝、私は一番に体育館にかけつけたが、局のスタッフはもう来ていた。そして、開館と同時にセツトの取り壊しが始まる。みんな黙っている。

「だめだった？」

私は恐る恐る聞いてみた。

「まだ、わからないんですけどね……」

ことは途中で切れたけれども、そのあとに続くことは

「おそろく……」

に違いない。

決勝の実況中継が中止と決まったのは夜中の三時だそうである。みんなほとんど寝ていない。バスケットの中継スタッフはかたづけを済ませると応援のために雲仙にかけつけるのである。文字通り不眠不休だ。バスケットの中継は雲仙の実況中継に切り換えられた。どのテレビも何時にスイッチを入れてもすべて雲仙の事件を報じている。暗い雰囲気の中、鶴鳴のバスケットも、優勝はなんなく決めたけれども何かしら重く、乗らないまま終わった。

雲仙の報道は続く。そして、火砕流が静まった後に現地に乗り込んだ捜索隊からの新しい情報が次々に入る。目をそむけたくなる黒焦げの死体。

「どこかに非難していますように」

そんな願いもむなしく、画面のテロップにS氏の名前が出た。ともに仕事をしたことがあるだけに辛かった。